

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K17436

研究課題名(和文) イギリス音楽教育のAppraisingに見る音楽の諸要素の指導・理解・評価

研究課題名(英文) Appraising in Music Education in the UK - teaching, understanding and evaluation

研究代表者

森尻 有貴 (MORIJIRI, Yuki)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：90757478

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、イギリスの音楽教育におけるAppraisingの学習において、どのような指導が行われているかを中心に、文献研究及びインタビューと授業見学等のフィールドワークにて、その実態を調査した。ナショナルカリキュラムの改定後、GCSEにおいてAppraisingがより重視されたことから、主に中等教育においては指導に重点が置かれると同時に、GCSEに向けて成果を出すことに指導が偏る可能性があることも示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research study explored the importance of music appraisals in UK schools through a literature review, interview-based study, and classroom observation. After the new National Curriculum was introduced in the UK, appraising music has been more emphasised in GCSE music. Therefore in secondary school education, music appraisal has become more highly prioritised in teaching towards high achievements in GCSE. As a result, music teaching in schools has been more influenced by this greater emphasis on appraisals than from the National Curriculum.

研究分野：音楽教育

キーワード：イギリス 音楽教育 Appraising

### 1. 研究開始当初の背景

我が国における小中学校の現行指導要領では、音楽を特徴づけている要素の聴取と理解が重要視されており、全ての音楽活動を通して目指される〔共通事項〕としても位置づけられている。音楽を構成している要素を意識的に聴取し、その役割を理解することは、音楽を受容・鑑賞する活動のみならず、より豊かな表現活動に取り組む上でも重要な能力となると考えられる。また、それらの音楽的理解を音楽の要素に関連づけて言語化することにより、言語活動の充実も目標とされてきた。

イギリスでは、音楽の要素の理解と音楽の要素に関連した分析的且つ評価的な学習活動を、Appraising としてナショナルカリキュラムの中に長年位置付けてきた歴史があり、それは教育的にも価値付けられてきた。この学習活動は音楽的な語彙を拡大し、イギリスの教育の中で重要視されている「批判的思考」を育てることに関連している。この概念は日本の音楽科教育の『鑑賞』が今後目指すものに関連すると考えられる。よって、その具体的な指導内容を研究し、実践的な指導方法や評価方法の示唆を得ることは、我が国の音楽教育の発展に貢献すると考えられる。

### 2. 研究の目的

(1) イギリスの音楽教育において、Appraising の指導内容、学校の音楽科教育における位置付け、音楽の要素に関連する学習に関してどのような認識を持っているかを明らかにすること。

(2) (1)の成果を受けて、日本における音楽の要素に関連する指導では、今後どのように指導が展開され得るか、実践的な指導方法や内容を提案し、国内の教育に適応した更なる方法の検討、直面し得る課題に関して考察をすること。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下の4つの方法を相互的に作用させることで行った。

(1) 文献研究：音楽の要素に関する教育学的研究、日本及びイギリスにおける実際の指導の研究について文献研究を行い、現状と課題についての検討を行った。文献研究は、イギリス政府が発表するナショナルカリキュラムの開示文書、GCSE に関して国から認可された機関である OCR、Edexcel、AQA が公開している資料をもとに、音楽科教育における音楽の要素に関する指導の経緯と変遷を考察した。また、ISM と呼ばれる音楽機関が発行する、学校教育への指針等を打ち出した文書等も対象とした。

(2) インタビュー：半構造化面接を実施し、その対象は、日本の小・中学校及びイギリスの初等教育・中等教育に携わる音楽科教員とした。また補完的なデータとして、イギリス

の大学で教員養成にあたる指導者にも、インタビューを実施した。インタビューの内容は、両国の指導の実態やカリキュラムとの関連、現状の課題を柱とした。また、必要に応じて、実際の指導現場で扱う教材や指導内容の資料等の提示を、相手の同意のもと求め、それらの内容の検討を行った。それらの教材等は下記の(3)と関連し、研究協力の相手校や財団から提供を受けた。

(3) 指導現場見学：イギリスの小中学校での授業とイギリスの教員養成課程での授業、及び学校音楽科教育の指導を補助する音楽財団のセッションにおいて、見学を行った。実際の指導現場の見学を行うことで、実態把握に迫り生徒の反応や取り組み方に関しても理解を深めることとした。具体的な指導方法、手立てや指導例、指導の成果、課題や問題点を浮き彫りにし、我が国における音楽の要素に着目した指導及び学習への適応とその可能性を検討した。

(4) 日本への適用性：イギリスの音楽指導者によるワークショップを行い、日本においてどのように受容されているかについてアンケート調査を行い、示唆を得た。

### 4. 研究成果

本研究による成果は、主に以下の5点である。

#### (1) ナショナルカリキュラムの位置付け

2014年にイギリスでは、ナショナルカリキュラムが大幅に改訂された。もともとガイドラインとしての役割が強かったものの、内容の詳細な記述に関しては簡略化され、実質その指導は学校や教師に委ねられている部分が多い。そのような状況で ISM (Incorporated Society for Musicians) は、指導に纏わる様々な指針や、ナショナルカリキュラムの分析等を文書として公開し、学校音楽科教育を支援している。これらの文書や資料によれば、各領域の活動の相互関連性が重要事項として残っていることは評価できる、としている。また、音楽の記号等を理解して使うことや、歴史的な背景を理解することが明示される等、学習内容の充実が図られている一方で、音楽的規範 (musical cannon) や識別と言った複雑な概念が提示されたことも指摘している。

2014年のナショナルカリキュラムの改訂に先立ち、イギリスでは2010年にアカデミー法が成立し、アカデミーとして認められた学校は、ナショナルカリキュラムに沿って授業を行う義務はないこととなった。アカデミーの承認を受けようとする学校は年々増加し、その流れは、近年加速化している。2018年1月時点では、初等教育においては27%、中等教育においては72%の子どもがアカデミーで学ぶとされた。2014年のナショナルカリキュラム改訂では内容が簡略化されたが、アカデミー法による社会的状況も相まって、ナショナルカリキュラムの効力が実質弱ま

ってきたと考えられる。ナショナルカリキュラムの改訂自体が、学校の指導内容へ強い影響を及ぼしたとは考え難い現状が浮き彫りとなった。実際、イギリスの初等教育及び中等教育で教鞭をとる教師たちへのインタビューから、ナショナルカリキュラムが 2014 年に改訂された前後で、この改訂に伴う現場への影響は大きくないことが明らかとなった。

#### (2) GCSE(中等教育修了試験)の影響と評価

(1)で明らかとなった状況下で、実際に学校現場で中核的な存在となっているのが、GCSE(中等教育修了試験)であることが明らかとなった。特に、中等教育での指導者は、ナショナルカリキュラムを考慮して学習計画を立てるのではなく、GCSEで課される内容を主眼として学習計画を立てている傾向にある。GCSEでは、音楽の基礎的事項を知識として理解する内容(記号や記譜等の知識)、音楽や楽曲、作曲家に関する内容、音楽の文化的・歴史的背景に関する内容等の知識と、それらを踏まえて音楽を聴き取る力との関連性が重要視されている。また、聴いた内容を言語化する学習の割合が高く、様々な知識と聴き取った音楽的特徴を関連させなければ記述できないような問題が課される。それらは、初等教育において用いられている教材等からも、伺うことができる。

GCSEにおける Appraising の比率は 40%であり、演奏や作曲と比較して比重が高い。扱う音楽の時代やスタイルは多岐に渡り、西洋クラシック音楽は全体の学習項目の 3 割程度に留まっている。近現代のポピュラー音楽、世界の音楽を幅広く扱い、それらは、単に聴いて親しむ、という内容ではなく、用いられる音列や音楽的特徴(リズム、形式、演奏形態等)に加え、文化的背景や他の音楽との関わりにおいても学ぶ。このような学習内容が、音楽的な見方や考え方を発展させることに貢献する可能性があることが示唆された。

2014年にナショナルカリキュラムが改訂されたことを受け、このGCSEの評価がA\*-Gの8段階での評価からGrade9-1の9段階へと変更になった。この変更は、評価をする側だけでなく、社会的にも混乱を招く側面も明らかとなった。イギリスにおけるGCSEのスコアは、その後の人生においても常に提示する機会があり(大学入学時、就職時等)8段階での評価結果と9段階での評価結果に、どのように整合性を見出せば良いか、という点で、社会的にも影響を及ぼしたと考えられる。

#### (3) 指導に用いる教材と内容と学習計画

イギリスには国定教科書はなく、指導をする教師が独自に教材を選定し、学習計画を立てている。初等教育と中等教育に携わる教員へのインタビューの中では、領域間の関連性が強調された。Appraisingでの内容が直接的に演奏や創作の学習に結びつくような学習計画が立てられ、指導が行われている実態が明らかとなった。例えば、以下のような授業

構成が挙げられた。

変奏曲を鑑賞し、楽曲の特徴、音楽の要素の変化や音楽的特徴、それら効果について議論し、学ぶ

変奏曲を演奏し、で学んだ変奏曲の特徴が伝わるように演奏したり、各要素の演奏効果について議論したり、分析したりする

学んだ内容を踏まえて変奏曲を作曲し、それを発表する。

このような領域を統合した学習計画が多く提案された。Appraisingで得た学びを表現に生かし、そこから得た知見をまたAppraisingの学習に生かすという循環が機能的に働いていることが明らかとなった。Appraisingが音楽を聴く力だけでなく、音楽を理解する力として位置付けている様相は、その指導内容からも示唆された。

また、教員が用いる教材の中には、他教科との関連性を意識したものが多くあり、他の教科での学習内容や児童・生徒の生活の中の概念と強く結びつく教材や指導法が多く見られた。

#### (4) 初等教育と中等教育の差異

教員養成大学のプログラム、及び学校音楽科教育を支える社会団体へのフィールド調査により、学校音楽科教育における初等教育と中等教育の差異が浮き彫りとなった。初等教育において音楽を専門とする教師が配置されていない学校も多く、より高度な内容の指導は難しい現状も見られる。また、演奏は学校外の機関やアウトリーチ等で学ぶ機会が増え、特に中等教育においては、学校音楽科教育の中で音楽教師による指導として比重が置かれているのは、Appraisingと作曲(創作)であることも示唆された。また、初等教育では様々な教材や楽曲に触れ、自由な音楽活動の可能性が広く保たれているのに対し、中等教育ではGCSEを意識した知識の獲得や試験に含まれる内容へ向けた学習が優先される傾向も見られた。そのような状況下で、初等教育と中等教育の接続は、課題が残されていると考えられる。

#### (5) 日本への汎用性

日本の鑑賞とイギリスのAppraisingを比較した場合、大きな特徴として挙げられることは以下の2点である。まず、1点目は(3)でも述べたように、Appraisingや鑑賞が、他の表現活動とどのように関連しているか、という点である。日本の教科書教材は、鑑賞教材として独立性が高く、そこで学んだ概念を表現領域に関連させることを目指しているが、教材としての関連性が薄いことが見て取れる。イギリスの教材や学習計画においては、教材間の関連性も直接的であり、これは学ぶ児童・生徒にとっても、見通しを持って学習することができ、Appraisingで学ぶ内容の意味をより強く認識し、実際に表現活動に生かすことの出来る効力感を担保する設定であると考えられる。

2点目は、Appraising と鑑賞における「聴く力」の位置付けと変換である。Appraising の試験では、聴いて記述をする部分が多く、聴取した音楽と知識を関連づけ、言語化することが強く求められている。また、聴いた音楽の要素を図や線で可視化したり、イメージに置き換えたりする学習内容が多く見られる。また、Appraising で学んだ音楽の要素を身体表現に置き換えたり、一部を演奏してみたりすることによって理解を深める学習の割合も高い。聴いて理解したことを、他の表現方法に変換し、理解を深める点が重視される学習活動が散見された。

以上のような観点は、日本における音楽科教育でも、教材選択や学習計画の中に取り入れることが可能であると考えられる。しかしながら、イギリスの Appraising に見られる活動内容に対する児童・生徒の達成度や取り組み方は、音楽科教育だけでなく、他の教科で育成される資質や能力からの影響も強いと考えられる。イギリスの学校教育で目指される論理的に思考する能力や批評する能力を育成することは、学校教育全体で取り組まれてきたことである。したがって、日本の現状の中で、音楽科教育単体で目指すには課題もあると考えられる。

これらの研究成果の一部は、国内学会において公表をおこなった( )。また、研究期間終了後に開催される学会等においても、今後公表予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

森尻有貴「イギリスの音楽教育における指導の動向-新ナショナルカリキュラムとの関連から-」2018年. 音楽学習学会第13回研究発表会. P.25

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

森尻 有貴 (MORIJIRI, Yuki)  
東京学芸大学・教育学部・講師  
研究者番号：90757478